

経済野話（原文） (2)国字の経済的改良

1. 吾々日本人の祖先が、固有の文字を持って居ったかどうかと云う点に就いて或る一派の考古学者は、古墳の石槨^{せつかく}に遺された文字様のものから想像して極簡単な文字が存して居った事を主張する者もあるけれども、これ等の遺物が文字であるかどうかは頗る疑問であって、先ず大体吾々の祖先は文字は持って居なかったと解釈するのが正当であろう。

日本書記には肥人肥書を有すとある、どんな文字であったか全く不明であるが兎に角、その当時今の漢字即ち吾々祖先の持って居ったものと異なった文字が九州地方に存して居った事は明らかである。

恐らく熊襲とか肥人とか、九州地方の早くから支那南部地方と交通して居った民族が彼の文字を輸入したものであろう。

2. 日本に支那から朝鮮を経て文字が輸入せられた時には、可なり面倒なかつ不便なものであったであろうと思われる。

後世になって漢文が一般に普及した頃には、それに馴れたから割合に問題も起こらなかったであろう。けれども文字の無い日本に文字が初めて入って来たのであるから、在来の言葉と新しい文字とを結びつけるのにはあれこれと苦心もし、その使用の不便にも我慢しなければならなかったものであろうと思われる。

早い話が人名や地名の如き、これ等従来存して居ったものに音で以て漢字を当て嵌めていったのであるから、その人名または地名が本来有して居った固有の意味は全く没却せられてしまったので、例えば阿波とか筑紫とかの地名には夫々相当の意味を持って居ったのであるけれども、漢字を音で当て嵌めてしまったからここに全く吾々には分からないものになってしまったのである。

名詞の如き、動詞の如き出来る限り在来の詞と漢字の意味とを合致するように文字を作っていったのであるが、勿論甘く当て嵌まらず、或いは漢字を其の儘に輸入

して使用し、或いは音に合わせていったものであって、その当時としては随分おかしなものであったろうと思われる。

然しだんだんと一般に使用せらるるに至り、馴れて来たので、つまり我国在来のものと合併したので、次第にその利便を感じるに至ったものである。

3. 野木氏の国字横組論に依ると「人間の眼は横に長く、縦に短い、それは眼球を左右に動かす必要が上下に動かすよりも地球上に生存している場合、より多く必要であるからである。

必要であり、使用するものは発達する、人間の眼球を動かす筋肉は、上下運動よりも左右の運動をするに適當した発達を遂げてしまった。人間の筆を取る手は右方から左方へ動かすよりも左方から右方へ動かす事の方が疲労を感じる事が少ない。それは前者が屈筋の運動を必要とするに反し、後者は伸筋の作用で出来るからである。」と。

私はこの議論は人間自然から出た正しい議論であると思う。実際、吾々の文字を横に書き、左から右に行く事が最も自然的である。殊にタイプライターやその他の新しい機械を利用し得る事に於いて、また数字を嵌入する場合に於いて万事便利な点が多く、この点は能率から考えて改良しなければならないのである。

4. 吾々日本人は生活の様式に於いて、大分欧米人と比べて損をして居る事が多いようである。例えば正座する事が礼儀の一つであって見たり、労働時間や訪問時間が不規則であって見たり、これが為に吾々の生活に於いてその精力を浪費する事は、一生を通計すればかなり莫大なものであろう。

殊にこの点は国字に於いて大きな損をして居るようである。日本の最高学府と云われる帝国大学は、中学から進んで行って愈々卒業するまでに 11 年間を要するのである。そしてその間の大半の精力は何に注ぐかと云えば、結局語学である。

英、独、仏の語学の為に大きな犠牲を払って居るのである。吾々が国字の不便か

ら受ける損失は国民的に考えて殆ど計量する事の出来ぬ大きな損失である。

故に国字をもっと改良する事はこの際、我国国民生活の能率を高める上から考えて最も大切な事で、もしこの語学の為に今までの様に多くの犠牲を払う必要がなくなれば、日本はもっと商業も発達し国富も増加し、世界の競争に堪える事が出来るのである。

5. ^{おも}惟うに現今の我国に於いて、欧米の知識は最も多く、英語から輸入せられたもので、国際商業の如きまた英語である。故に英語の速成および普及は当今の急務ともいうべきである。

然るに現在の我国文は英文との関係絶無であるが故に一般学生は英語の学修に多くの歳月を費やし、徒に教育年限を長からしめ、延いては国力を消耗しつつあるのみならず、また日常百般の書類を作る場合に於いても英文の如くタイプライターに依り、急速に幾多の文章を記し、以てこの多忙なる時世の要求に応ずる事の出来難い現状である。

以上の如き現在の状態であるから国字に対する学問上の議論や多くの改良論の成否は別として、手取り早く出来る語として、また實際上の効果を揚げる事の出来る国字の改良方法として次の如き提案をして見たいのである。即ち、

- (1) 熟語は英文を用い、読み方に音と訓との別を設け、日本語を訓とし、英語を音とする。而して熟語と熟語との間のデニオハは日本固有の仮名文字もしくはローマ字を挿入して綴る事とする。
- (2) 書き方は英文の如く左から右に横に綴って行く事とする。
- (3) 読み方は普通の場合、日本語を用うるも英語を知って居る者は、熟語のみを英語にて読むも差し支えない事にする。而して名詞は凡て仮名またはローマ字で記載し、またもし英語にその名詞の存するものは之を英語で記する事とし、この読み方は日本語式にする事。
- (4) 標準的に新しい改正された辞書を作成し、日本語に対する英文英語を一定する。蓋しこれは音と訓とを明確に区別する所以である。而して教科書および

凡ての文章または書類に記載する熟語の意義は、前記の辞書を標準とし後日対訳に誤りありや否やの問題を生じた場合にはこの辞書に記載されたものを正当の意義と見做し、之を動かす事の出来ないものとする。故に教科書の如き。

新聞紙の如き、凡て前記の辞書を標準とし、日本語を知らざる者にも之を読むに不便なからしむるようにする。尤もここに日本語というのは、現在普通語と成れる漢字を併せて含むは勿論である。

6. 今前記の条項に従い私の提案する国字改良の例を挙げて説明すると次の如くである。

ふくざわ ^{せんせい}Professor ^{もじ}idiographの^{おしえ}teaching,
^{にほん}Japan にかなの ^{もじ}ideograph ありながら ^{かんじ}china-character を ^{まじえ}mix
^{もちいる}use は ^{はなはだ}very ^{ふつごう}inconvenience なれども ^{むかし}ancient-time より ^{しきたり}の usage
にて ^{ぜんこく}whole-country ^{にちじょう}daily の ^{しよ}writing に ^{みなかんじ}all china-character を
^{もちいる}use の ^{ふう}custom となりたれば ^{いまにわか}now suddenly ^{これ}this を ^{はいし}abolotish せんと
するも ^{またふつごう}also inconvenience なり

^{おも}惟うに往古吾人の祖先が漢字を輸入し、現在吾々の国字を作ったのと同じ筆法に依り英語を採用し、仮名を混じ語法の異なる処を調和し、国字を改良する事は時の長さを加算して考えると必ずしも突飛な論でもなく、また新奇発明の案でもないで、ただ実行の容易なるものを選び、理想論にのみ依らないばかりである。

斯くいえば、人或いは英語を日本語または日本語を英語で読む点に就き、その実行如何を疑う人が無いでも無かろうが、この点は現在の漢字が日本語または漢語で読まれつつある実情に徴^{しる}しても、かかる心配をする必要がないのである。況んや1,2,3の如き字は現に或いはイチ、ニー、サンと称え或いはまたワン、ツー、スリーと呼びつつあるのではないか。

ただここに実行上少しく遺憾とする所は、英語に存在しない我国の名詞を如何すべきかの点である。蓋し我国の名詞なるものは語音の外に多少の意義と趣味とが有

るもので、之を仮名で記すときはこれ等の意義は往々文字の上に伝わる事無く、恰も新聞紙上にて西洋人の名前を読むが如く、ただその語音を知るに止まるに至るであらう。

然しながらこの点も能く翫味して見ると、英文に存在しない日本の名詞は誠に少ないのみならず、この国字改良を断行すれば若干の歳月を経過する間に凡ての名詞が英語と合致するように自然に馴れて来て、何等の故障も起こらぬようになるであらうと思う。

考えて見るに古代に於いて吾々祖先が漢字を採用し、現在の国字を作り始めた場合にもまた同様の不便が存した事は想像に難からざる所であって、例えば「土佐」とか「越」とかの地名の如き、その当時は夫々相当の意義を有して居ったもので、この場合漢字にその意義を併せて伝うべき適當の名詞が存在しなかったが為め止むを得ずその語音のみを伝え、世人が遂にその当初の意味を忘却したものであらうと思われる。

而してこの当時にはその他にも尚多く語音のみを記して名詞が次第に分解されてしまったのであって、現在の英語と邦との融和もまた之れと同じ結果になるのである。

7. 今もし私の提唱する如く簡便に現在の国字を改良することを敢えて行うとすると凡そ次の如き利益を得る事が出来ると思う。即ち、
 - (1) 我国文を記載するに当たってタイプライターを使用する事が出来るから、之に依って著しく毎日の生活を簡易化することが出来る。
 - (2) 英語の知識が一般的に普及せらるる事となり、一般国民が外国の文明に親しむ事が容易となり知識を世界的に求むる事が出来る。
 - (3) 小学校教育だけで英語の予備知識を修得することとなるが故に、初等教育以後苦しい長い語学の為めの労費を省く事が出来るとともに従来の小学校以上の教育年限を著しく短縮する事が出来る。
 - (4) ローマ字採用論者の主張する如く日本文をローマ字で綴るときは、同音異訓の文字の場合に甚だしき不都合を生ずる事となるが、私の主張する方法に於いて

は斯る不便はないのである。

- (5) また仮名ばかりで日本文を綴らんとする場合にもローマ字綴りの場合と同様の不便を生ずるのであるが、この点この案なれば心配する必要がないのである。

8. 論者或いは曰く「国字はその国の生命であり、その国民とともに発達し終始したものである。然るに今我国が英語を輸入する事は結局、我国の滅亡を招く事であって絶対に不可である」と。

然しながらこの議論は根本に誤解があるのであって、国語と国字とを混同したるの誤りである、即ち国語なるものは確かに国の生命で言葉を変えると云う事は絶対に不可である。然し国字を輸入する事は何ら差支えはないのである。

人或いは曰く「他国の言葉を輸入するもその実益は少ないであろう」と。然し私は思う、前述の如く他国の国語は輸入すべきではないが、その文字を借用して我国民の知識を高める事は寧ろ必要な事で、その昔吾々の祖先が支那から漢字を輸入して彼の当時の高い文明を吸収した如く、現在の吾々が英語を輸入し新しく知識を増す事は、反って国民教育に資し延いて我国勢を振起する所以で、私はこの点からして英語を我国語中に取り入れ広く知識を世界に求むべきであると信ずる。

^{おも}惟うに吾々日本人は精神教育に於いては早くより発達し、頭脳の働きに於いては決して劣等な民族では無いのである。然るに往々その競争に於いて欧米人に遜色あるを示すは、実にこの国字の不便な為であって、早い話がタイプライターを使用するとせざるとの間には5人の人手と1人の人手との差異を示し、頗る能率が上がらない有様で、若しこの国字さへ改良するならば一部の論者の考えている如き、亡国の杞憂が反対に大いに国民の活動力を増す事となるのである。

9. 最近文部省を始め各新聞社が協力して漢字制限の実行を試み、既に相当の好成績を示して居る。然しながら私は、この点に就いても斯界の先輩に尚百尺竿頭さらに一步を進めて、日本文に就いても制限を設け、従来の長い不便な面倒な文句に略語を作り、事務の進捗を計られん事を希望して止まないものである。

実際吾々の毎日用ゆる日本文中には例えば「何々せざるべからず」とか、「御座候」とか随分長い煩雑な文句があつて、之が為に不便を感じる事は少なくない。

何んとかこれに簡単な非常に略語を作れば大変便利になると信ずるのである。恐らくこの種の略語は 20 か 30 かも作れば、吾々は毎日助かるであろうと思う。

口語体の文章に於いては殊にその感じが深いのである、勿論私は別に口語体というものに反対する者では無いが、唯口語体は文章が長くなるのでかなり書く時に不便である。

例えば彼の裁判所で書記が吾々の口述する「何々ではありません」式のものを筆記する不便と之が為に多くの時間を取られる事の煩瑣からして、今にして口語体もこの不便と時間労費の欠点とを略字に依って早く改良しないとこの不便の為に永続しない事になりはしないかと杞憂するのである。

要するに現在の我国語および国字は改良すべき多くの欠点を有するものであつて、私の提唱するこれ等の改良論はその方法は学問的では無いかも知れないが、實際的であり、また実行の容易である事に意を注いだもので架空論よりも実益を主とした見地から、特に之が実行を希望する次第である。

国字の問題は、我國民生活の重要な問題であるが故に、この点に関しては斯界の研究者の叱正を仰ぎ、重ねてその改良実現の日の一日も早からん事を希望する次第である。